

NEXT CONCERTS

>> 次回東京定期演奏会

第782回東京定期演奏会

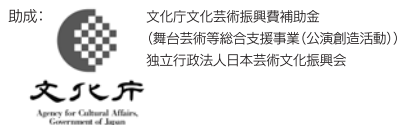
2026年 7月10日(金) 19:00 開演
7月11日(土) 14:00 開演
サントリーホール

プレトーク 山崎 浩太郎氏 金曜日/18:30~
土曜日/13:20~

■1回券料金

S ¥10,000 A ¥8,500 B ¥7,500 C 売完 P ¥5,000 Ys (25歳以下) ¥2,500

※障害者手帳をお持ちの方は割引がございますので、サービスセンターにお問い合わせください。



ルルー再び!夏の東京に響くベートーヴェンとプロコフィエフの名作

ベートーヴェン:
ヴァイオリン協奏曲
二長調 op.61

プロコフィエフ:
交響曲第5番
変口長調 op.100



指揮: フランソワ・ルルー



ヴァイオリン: 諏訪内 晶子

※当初の予定から変更になりました。

次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー!

フランソワ・ルルー編

きき手 山崎 浩太郎

現代を代表する世界的なオーボエ奏者であるフランソワ・ルルーは、近年は指揮者としての活動にも力を入れ、ヨーロッパ各地の交響楽団との共演を重ねている。日本フィルとの2022年の初共演では、生彩に富んだ指揮ぶりで聴衆だけでなく楽員まで魅了した。今回が早くも3度目の登場となる。

——2022年と2024年に指揮されたさいの、日本フィルの印象をお聞かせください。

とても高いプロフェッショナリズムを持つオーケストラという印象を受けました。厳格さと同時に柔軟性もそなえている。2024年には、木管十重奏のためのラフのシンフォニエッタと一緒に演奏しましたが、本当に素晴らしかった。深い音楽性を持っていることを感じて、感激しました。2022年に指揮したビゼーの交響曲第1番も、とてもよい思い出になっています。

——今のお話にあったラフの作品のように、これまでの演奏会はルルーさんがオーボエを吹かれて、管楽器や弦楽器のアンサンブルと共演する作品も含まれておりましたが、今回は指揮だけに専念されるのですか?

最近ヨーロッパでも、純粋に指揮だけをするコンサートがどんどん増えているのです。それに今回は、ソリストとして諏訪内晶子さんが出演されるので、指揮者として彼女とぜひ共演したいと考えました。

——諏訪内さんとは、2005年に録音された、バッハのヴァイオリンとオーボエのための協奏曲のCDで共演されていますね。

そのレコーディングのあとに、諏訪内さんとはヨーロッパ室内管弦楽団と一緒にツアーをやったこともあるのです。でもそれ以来共演の機会がなかったので、演奏会での再会がとても楽しみです。特に今回は、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲という名曲での共演ですから。

——ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲はこれまでも指揮されているのですか?

たくさん指揮しているというわけではありませんが、妻がヴァイオリニストなものですから(笑)、スペインなどで共演して指揮したことがあります。

——そうでした、リサ・パティアシュヴィリさんでしたね(笑)。では、この作品についてどのような印象をお持ちですか?

とても美しい作品です。緩徐楽章などは、神がかっているといってもいいくらい。全体を通して、雄大な自然の強い力を感じます。自然というのは、インスタントにできあがるものではなく、時間をかけて育っていくものです。特に第1楽章では旋律が反復されるうちに、徐々に成長していく。そこに、自然の力強さを感じます。

——なるほど。次第に育っていく自然の力。どのような演奏を聴かせていただけるのか、とても楽しみです。では続いて、後半のプロコフィエフの交響曲第5番は、どうしてこの曲を選ばれたのですか?

今の時代に必要だと確信したからです。人間の自由、というものの素晴らしさを讃えている作品だと思いますから。この作品は第2次世界大戦中に作曲され、ナチスを打倒しようという時期に初演されました。そういった背景も含めて大好きな作品なので、今回指揮できることをとても楽しみにしています。

——作品のききどころはどのあたりと思われませんか?

特に注目していただきたいのは、第3楽章のアダージョと次の終楽章ですね。前者はとても深い感情表現をもち、後者は爆発的な、力強く勝利する終楽章。これらがポイントだと思います。

——自由を讃え、その勝利を確信させる作品。現実の世界にも、そうした喜びが一日も早く訪れることを祈りたいですね。

まさにそれが、今回のプロコフィエフの演奏を通じて、多くの方にお伝えしたいメッセージです。